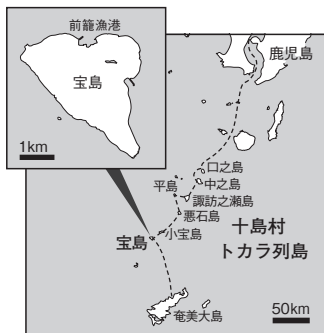


一般社団法人 宝島

バナナファイバーと地魚加工

—商品開発で魅力を発信

一般社団法人宝島代表 竹内 功



宝島：トカラ列島の有人島で最南端にある亜熱帯植物とサンゴ礁の島。面積7.07km²、周囲12.1km、人口114人（令和2年2月末現在）。海賊キッドが財宝を隠した島ともいわれる。先史時代から南北交流の地だった。畜産や島バナナ栽培、水産加工などが盛んで人口が増えている。

トカラ最南端で島唯一の法人を設立

宝島は、鹿児島県の屋久島と奄美大島の間広がる十島村（トカラ列島）の最南端にあります。鹿児島市からトカラ列島の島々を経由して奄美大島まで「フェリーとしま2」が週二往復、運航しており、宝島へは鹿児島からは約一三時間、奄美大島からは約三時間かかります。港に着くと海底都市をモチーフにした大きな壁画が迎えてくれます。島に警察や病院はもちろん、ATMすらありませんが、サンゴ礁に囲まれ、海はもちろんすばらしく綺麗で、人もおおかたで住みやすい場所です。

「島の特色を生かし、かつ他にはないものをつくりたい」そんな話を島の夜の集まり（飲み会）でしていたところ、住民の方から「一〇〇年くらい前、島では糸芭蕉から芭蕉

布が織られていた」という話を聞きました。移住者である本名夫妻と私たち夫婦が興味を持ち、それをきっかけに住民への聞き取りを始めました。単なる興味を超えて活動の幅を広げようと、宝島自治会に企画書を提出したところ、これが認められ、二〇一四年に住民有志一〇名ほどが自治会の「バナナファイバー事業部」として活動をスタートしました。総務省の過疎地域等自立活性化推進交付金を活用し、収穫後の島バナナの木から繊維を抽出、古くから南西諸島に伝わる伝統的な芭蕉布の技術を応用し、「宝島バナナファイバー」を開発しました。

そして、翌年一月、中心メンバー四人が自治会から独立、島唯一の法人として一般社団法人宝島を立ち上げました。世界でバナナの繊維を活用している地域はほかにもありますが、良質の糸にするのが難しく、一度は諦めかけました。



定期船で宝島港に着くと迫力ある壁画が一面に広がる。



島内では島バナナが多く育てられている。

しかし、この年にクラウドファンディングで目標額を達成したこともあり、皆さんの協力を得てバナナファイバーの商品化に成功しました。

バナナファイバー事業——島の技術で商品化

宝島では自生している糸芭蕉のほか、あちらこちらに島

バナナ畑があり、小規模ながら高齢者を中心に栽培が盛んです。島バナナは輸入バナナより酸味があり、すつき

りとした味わいで、そのまま食べても、甘味が増すように凍らせてジュースにしても美味しくいただけます。本名夫妻は島バナナを「バナナコンフィチュール(ジャム)」や「バナナカレー」に加工し、ロングセラー商品として全国へと出荷しています。

バナナは一本の幹から一度しか実が採れないので、あとから成長してくる子株の邪魔にならないよう収穫後は切り倒します。こうして倒した幹や、自生している糸芭蕉の幹を繊維にしています。この繊維(バナナファイバー)をオーガニックコットンと混ぜ、紡績糸をつくります。自然由来の顔料を用い、おもにベンガラ染め(土を原料とする染色技法)で、小物や帽子などを製作しています。また、昔は大島紬の織り手の島であったことから、今なお残る高齢者の手仕事

の技術を活かし、帯に糸を織り込んで世代を超えた布づくりの技術伝承をすすめています。現在は、首都圏での展示会への出店を続けながら販路拡大を図っています。さらに、来島した観光客の方には、機織りワークショップや染色ワークショップを行なっています。



開発したバナナファイバーを用いた帯や小物。

生産が島内で完結し、その過程が透明化されていることは、離島のハンデを逆手にとった特長になります。今後はアパレルブランド「バナナイロ」として、島にあるものを使ったエシカルな（生産から消費までが倫理・道徳的に行なわれる）この取り組みを広く世界に売り出していきたいと思っています。

水産加工事業——島内外に販売

一般社団法人宝島では水産加工事業にも取り組んでいます。昔からトカラ列島ではトビウオ漁が盛んで、塩干が特

産品として鹿児島島内外に出荷されてきました。毎年五月から七月にかけてトビウオが産卵のため群れで港に入ってきます。子どもでも懐中電灯とタモ（網）さえあれば晩のおかずを獲ることができこの時期は、毎日港に行き確認をします。トビウオが入っていれば住民総出で、タモですくったり、刺し網を掛けます。これまで、捕れたトビウオは共同で捌いて、強く塩を利かせて塩干をつくり出荷していましたが、ここ三十年の間で食生活の変化などによりあまり売れなくなり、今ではほとんど出荷する人がいなくなりました。

私は移住当初から漁師さんに弟子入りしてトビウオ漁をしていたので、一般社団法人としてはトビウオの加工からはじめ、徐々に旬の魚、例えば沖サワラや島カツオなどを低温でスモークし、魚の生ハムや、刺身の燻製を製造、販売しています。

小さな島なので水揚げ量は少ないですが、県の補助を使って村が整備していた液体急速冷凍機を活用して獲れたての鮮度を保ち、商品化することができています。現在は「はなみ丸商店」というブランドで、定期船など十島村関係の場所や、奄美大島や首都圏の飲食店などに出荷しており、インターネット販売もしています。

これまで、島には魚屋がなく、新鮮な魚を食べるには自分で釣るか、漁師さんから丸ごと一匹手に入れ、捌いて食



宝島ではトビウオ漁が盛ん。

べるしかありませんでした。そのため、島内販売も好評で、加工場の前で刺身のパック売りをしたところ、学校の先生やお年寄りなどに大変喜ばれました。今後は丁寧な商品づくりを続けながら、宝島だけでなく村内の他の島からもフエリーで魚を届けてもらい、さらに商品を開発、広めていきたいと思っています。

個人の仕事やプライベートと両立

上記二事業に加え、村の高速観光船「ななしま2」（二〇トン）の管理運営や、島内の小さな工事などを村からの委託事業として行なっています。島の便利屋さんのような形で、パソコンの修理や動物の餌やりなども頼まれれば何でもやるようにしています。

もやるようにしています。

本名夫妻はさまざまな商品の開発販売、私たち夫婦は島ラッキョウや島バナナ、パッションフルーツ栽培などの農作業も忙しく、メンバーは会社の仕事のほかに、子育てや個人個人の仕事をしている状況です。「そんなにいろいろやって大丈夫か？」と心配されることもありませんが、自宅から職場は歩いてすぐで、毎日同じことを繰り返すような仕事は少ないので、精神的な負担は少なく、忙しくしながらも、のんびりとした島生活を送っています。メンバー一同「自分で出来ること、島のためになることは、どんどん楽しんでみながらやる」という気持ちで日々取り組んでいます。

島人と行政の手厚いサポート

私たちがこのように活動を続けられるのは、移住者に対する島人の懐の深さ、そして十島村の移住対策の手厚さのおかげです。

バナナファイバー事業では昔の繊維の採り方から織物の織り方、水産加工事業では魚の捕まえ方、捌き方などを、それこそ一から手取り足取り諸先輩方に教えていただきました。信号機もない小さな島で濃密な人間関係の中、時には厳しく、そして困っている時には手をさしのべていただき、これまでも難題を解決してきました。現在も島の方々にはパートタイムで働いてもらったり、技術指導をお願いしています。



トビウオの生ハム。

の生活保障をしていただきつつ、やりたいことに打ち込める環境が整っています。

しかし、さまざまな理由で島を離れていく方もいます。すべての人にとって島生活が合うとは限らないからです。ただ、若手がいなければ子どもが生まれることもなく、そうなれば島は急激に衰退してしまうでしょう。そんなこと

また、十島村は行政と住民との距離感が近く、職員さんが島に来ると

一緒に盃をかわすことも珍しくありません。相談しやすく、とても頼りになる存在です。

村の移住対策も充実していて、村営住宅の斡旋（2DKが五千円から）や、二年～五年の就業者支援制度（月額五千円～一万円）、子どもや高齢者向け手当など最低限度

にならないよう、私たちは島に新たな産業をもっと興したいと思っています。

Uターン増を目指し高めたい島の魅力

島では繁殖和牛の生産が盛んで、働き盛りの世代はほとんどがそれに従事しています。しかし、その他の産業に乏しく、美味しいものがたくさんあるのに特産品もほとんどありません。海に囲まれているのに、漁師さんも片手で数えるくらいです。第一次産業の担い手不足はもろろんですが、その他の仕事の選択肢が極端に少ないのが現状です。

私たちはUターンですが、Uターンがもっと増えればと思っています。島にいる三〇人ほどの子どもは、島内に高校がないため、中学卒業と同時にほとんどが島を離れることとなります。仕事がない中で、島を離れた子どもたちは、帰ってきて生活したいと考えることはできないと思います。このままでは島は立ち行かなくなるのではないかと。たとえ多くのUターンが来たとしても、それで島の文化は守られるのだろうか。それを良しとしないならば、私たちに何ができるのだろうか――。

私にも三人の子どもがいます。長女はあと七年で島を離れる予定です。子どもたちが親元を離れ、他地域で刺激を受け、島のことを思い返すときに、島に帰って生活することを将来の選択肢として考えられるか、そのような魅力的な島にできるのかを、夫婦で考えています。そして、その

ためにできることはやっていきたいと思っています。

島は皆が親戚のようで、一つの会社のようにでもあります。運命共同体ともいえる関係性の中で、私たち一般社団法人の役割はなにかを考えて、島内の仕事を生み出し、島外に出荷できる商品をつくり、島の文化や食生活、自然に多くの人に関心をもってもらえるよう、島の魅力を高め、発信していきたいと思っています。

今後は新規事業にも挑戦

移住希望者のために情報発信をして、年に一〇〇名ほど



ともに活動する島の皆さん。前列中央が筆者と同じく移住者で、会社の中心メンバーでもある本名一竹さん。

の学生ボランティアを受け入れている個人的な経験を活かし、宝島自治会や行政と連携して島の生活が体験できる「大人の島ながれツアー」を実施したいと思っています。この催しを通じて、住民が感じている島の良さや、移住者から見た島の良さが参加者に伝わるようにしたいです。

また、商品開発の面では、砂丘で育てた島ラッキョウの漬物の売り出しや、レトルト技術を使った常温魚商品の開発、さらに3Dプリンターを用い、バナナファイバー抽出後の残渣繊維を利用した、バナナ和紙の開発などに取り組んでいきたいと思っています。

会社の中心メンバーは変わらず四人ですが、パートタイムでお手伝いいただいている方を含めると一五人ほどに関わっていただいています。島のため、子どもたちの未来のために、地道に活動を続けていきたいと考えています。



竹内 功 (たけうち いさお)

1972年埼玉県生まれ。2010年に夫婦で宝島に移住し、現在は家族5人で暮らす。島ラッキョウ、熱帯果樹(島バナナ、パッションフルーツ)農家で、トビウオ漁師でもある。趣味は料理と読書。